
アリストンネル

さすらい物書き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリストンネル

【Nコード】

N2437L

【作者名】

さすらい物書き

【あらすじ】

アリストンネル読了後の読者様へ。

作者より、挑戦状です。

「電車で携帯小説を読んでいた“アナタ”はどうなってしまったのか？」

出鱈目のバラバラに組み替えられてしまったこの物語を正しい順序

に並び変え、ぜひともこの問いに答えてみてください。

（前書き）

【joker】

彼女がアタシを？^{つか}まえるのは容易なことのはずだ。アタシは走るのが速くないし、いま履いているブーツは決して走るのには向いていないから。

ただアタシの後ろで彼女が“鍵”と呼ぶ鋭利な刃物が繰り返し執拗に振り回されても、刃は一度もアタシの身体に当たっていない。疲れさせた後で、弄り殺そうという算段なのだろうか？

そんなアリスの思惑が伝わってきた気がした。

走る。

走る。

転びそうになる。

体勢を立て直す、走る。

「時間制限はないわよ。せつかくだから楽しんで逃げてねえ」

アリスが後方から勝手なことをほざいている。バカにするな。急に怒りが湧いてきた。爆発的に。

なんでアタシが逃げなきゃいけないの？

反撃　反撃はできないかしら

いつものアタシの持ち物じゃないモノが、胸元にあった。

懐中時計。

くすんだ、古い、真鍮の懐中時計。

文字盤に違和感。

1から13までの時刻を表す数字。そして、反時計回りに回る、針。

手に取ってみた。

ぶわん

懐中時計が膨らんだ　　！

円形の、盾の形をとって、アタシの左手におさまる。

ちょうどいい大きさ。いかにも丈夫そう！

トンネルは、逃げても逃げても変わらぬ風景。坑内に反響する追う者と追われる者の靴音。ブーツを履いた足が痛い。もう何時間

いや、まだ数分？　時間の感覚も狂ってしまっている　逃げ続けているのだらう。

もう嫌だ、疲れた。

埒があかない。

アタシは意を決して反転した。

アリスは、アタシのその動きに呼応して、剣を振り下ろしてきた！

がちゃん！

「うおおおっ！！」

品のない声を絞り出しながらアタシはアリスの剣を全力で押し返す！そして、そのまま勢いと全体重をのせてアリスに覆いかぶさった。

アタシの黒のミニハットカチューシャが外れて落ちる。

アリスの首にかかるネックレス。それを力いっぱい引っ張って、引き千切る！

アタシは汗で髪の毛がぐしゃぐしゃだ。長い髪の毛のせいで視界が邪魔されるが、ヘアースタイルを整えている場合じゃない。奪い取ったネックレスについていた安全ピンを外し、我ながら器用に握りなおす。

「死ね！」

渾身の力を込めて黒いフードからのぞくアリスの首すじにピンの針

を突き刺した　　突き刺そうとした。

ぐず……っ

突き刺さったのは、アリスの手のひら。アリスは自らの左手でアタシの攻撃をガードしたのだ。

「そうこなくちゃ……！」

アリスは嗤い、ピンから手を引き抜く。

飛び散る赤い血。

アタシの白いブラウスにも飛び散った。

ぐっ……

アリスの手が、アタシの首に掛けられた。

すさまじい握力だ。痛い、首の骨が、折れ、る……！！

「素敵なチョーカーね。ねえ白ウサギさん。“チョーカー”って、

“窒息させるもの”っていう意味だって知ってた？」

アリスはそういうと、アタシの唇に自分の真つ黒な唇を重ねた。

「?!」

あらがえない。アリスの舌がアタシの口の中に侵入してくる。

息が……でき、ない

【white】

アナタは携帯を開いている。

携帯には文字が並んでいる。アナタが読んでいるのはケイタイ小説『アリストンネル』。

電車は揺れながら進んでいる。アナタと何人かの乗客を乗せて。

「いつかは出て来れるかもしれないけどね。でも……そのときは、アナタはアナタじゃなくなってるかも。このトンネルに長くいると、魂が黒ずんでいくから。邪悪の色にね」

不気味で、変な小説だ。

どうしてアナタはこの小説を読もうと思ったのだろう。思い出せない。

独りで買い物に行く途中だった。

アナタは可憐なロリータガール。孤高な魂を守るため、本当の自分を解放し疾走させるために、そのためにはロリータで武装するしかない。

今日身に纏いし服は、白のフリルブラウスに、黒のコルセットワンピース。拘束具のようなベルト。白と黒のボーターのニーソックス、黒のブーツ。首には黒い革のチョーカー。背中まで伸ばした艶やかなまっすぐな黒髪に、黒いお人形さん用の小さな帽子のついたカチューシャ。

甘ロリや、姫ロリは、アナタの魂にはそぐわない。アナタはやはり、ゴシックアンドロリータを身に纏ってこそ本来の姿となる。

がたんごとんと揺れて進む列車。
とたんに襲い来る睡魔。

世間の喧騒が遠くに離れてゆく。

アナタは昏睡状態に落ちていった。

【spade】

「嗚呼もう！　ぼんやりさんもいい加減にして。ちなみに、アタシ、一応こつというモノも持ってるんだけど」

執拗にアリスと名乗り続けるオンナが、何処から取り出したのか、銀色のなにかを、騎士が剣を構えるように構えた。

ロングソード……？　ゲームとかに出てくる、西洋の剣だ。

「剣じゃないわよ、無粋ね。これは“鍵”。扉を開くカギよ」

鍵……とアリスは云ったが、鋭利な刃物はどう見ても武器だ。

「アナタが逃げないのなら、もうこの場でアナタを殺してもいいのよ。別にそれはルール違反ではないから。非道く待ったわりに、あっさり終わらせちゃうのは、ちょっともつたいない気もするのだけれど」

アリスが、アタシに向かって歩いてきた。

やばい。

殺される。

直感で悟った。この殺気は本物だ。

アタシは駆け出した。ブーツが走りにくいなんて云ってられない。

？まったら、殺される。

「嗚呼……わくわくしちゃう」

アリスが恍惚とした声を漏らした。

【blue】

気づくとアタシは、トンネルの中にいた。

そう高くないアーチ型の天井。煉瓦の壁。数メートル間隔で灯りがともっている。

あれ？ さっきまで、アタシ、たしかに電車に乗っていたよね……？

頭がぼんやりしていて、ついさっきのこととも思い出せない。記憶がさかのぼれない、と同時に、異様に この感じ、前にもなかった。つけ デジャヴの感覚も走り抜ける。思考が、バラバラのパズルピースのように散らばってしまっている。

嗅いだことないけど、クロロフォルムとか嗅いだら、こんな風になっちゃうんだろうか。

アタシはそんな呑気なことを思っている。

いま置かれている状況について、いろいろ考えてみた。でも、さっぱり解らなかった。解らないなら仕方ない。先へ進もう。

アタシはトンネル内を進む。坑内に響き渡ってゆく、アタシの足音。トンネルは一方通行。アタシは独りぼっち。

そこに、声が聞こえた。

淫猥な声質の、耳にまとり忍び込むような声が。

「ようこそ、アリストンネルへ。歓迎するわ、白ウサギさん」

【club】

アタシには確かな勝算があった。

脚力は実は互角なのだ。アリスも、白ウサギも。

なら、スタートの時点で立ち位置がわずかでもゴールである“お城”に近い白ウサギの方が、？まるよりも速くゴールへ辿り着ける。

わき目も振らずに、走り続ければ。

アタシはそうした。

アリスは必死でついてきた。だけど、追いつけはしなかった。

アタシの目の間には、念願の、夢にまでみたお城の庭が広がっていた。

咲き誇る赤と白の穢らわしい薔薇がアタシを祝福している。

勝った。

身体と心を構成する組織が全部組み替わっていく。

久しぶりの娑婆？

それとも初めての世界？

どちらにしても嬉しい。

どう表現していいんだろう、この解放感　　！

「左様なら、アリス。そして、忌まわしいアリストンネル」

アタシの魂は、歓喜にうち震えた。

【heart】

全身全霊、必死になって抵抗を試みるアタシ。

自分の口の中を蠢くアリスの舌に、決死の思いで噛みつく！

「っ……！」

成功した　？！

アリスの口元から、赤い血が滴った。

「やるわねえ白ウサギさん。でも、ご免なさい。今度は手加減なしに一気に殺してあげるわ。死因が“KISS”なんて、ロマンティックじゃない？」

ぐいつ

身体を引き寄せられた。

再び唇を奪われる。

「うう……ん！」

鼻から、死に物狂いで空気を吸いこもうとする。

「……んぷ！」

漏れた声は、アタシのものだったのかアリスのものだったのか。解らない。

アリスは、無慈悲にも、アタシの鼻に指をかけ、強くつまんだ。

口はアリスの口にふさがれ、鼻は指で抓まれて完全にアタシの身体は酸素の供給経路を失った。

肺が二酸化炭素だらけになってゆくアタシの身体は、すぐに活動限

界を迎える。

苦しい。眼球が飛び出してしまうそうだ。
呼吸、完全停止。頭がガンガン痛み出す。鼓膜が破れる。本当に、
頭が割れる。

“死”

鼻血がこぼれる。

死の実感が襲いかかってくる。

アタシは、これから死ぬのだ。意味もわからず。

漆黒の帳が下りてきた。

窒息死。

なんて無残な死因だろう。

そして、

アタシは、
アリスに、

息の根を止められた。

（後書き）

【red】

そこに立っていたのはオンナだった。

街で見かけたことのないタイプのゴスロリスタイル。全身真っ黒。胸元が大きく開いている。その胸元に巨大な、安全ピンをモチーフにしたネックレスが目立っている。編み上げのロングブーツだけが炎のような赤。ブーツの底の部分と靴紐も真っ黒。

西洋の魔女と女王様をミックスしたようなシルエツト。黒いフリルのついたフードを目深にかぶっていて目より上の表情が見えない。唇はブラックのリップが塗られ、そこから赤い舌が猥褻な動きで覗いた。

「さあ 追いかけてこを始めましょうか、白ウサギさん。アタシの名前はアリス。アナタを捕まえたら、アタシの勝ち。アナタが“ゴール”に辿り着いたらアナタの勝ち」

意味不明なことを云う。ナニヲ、イツテイルンダ、コイツハ？

「何をわけ解らないこと云ってるの?! ここはどこなの? 悪ふざけならよして! 帰してよ!」

アリスと名乗る黒い女は嗤った。

「あらまあ。お下品な声を出さないで、白ウサギさん。追いかけてこは、このトンネルの この世界の唯一絶対の掟。ルール。ここにはダイスもチェスもないわ。あるのはトンネルの壁と、トンネルの先にあるゴールだけ。ここには他には誰もいない。いるのはアナ

タとアタシだけ……」

囁くように、歌うように話すオンナの言葉はまるで煉獄に響き渡る呪詛の言葉のように聞こえた。

なんだか本当に、頭がぼんやりと　ぼんやりなんてレベルじゃない。頭が空っぽになってゆく感じ　怖い。

「はぐらかさないで答えてよ！　ここは何処！　アナタは何者？！」

「ここはアリストネル。アタシはアリス。アナタは白ウサギ。もう、元の名前も思い出せないんじゃない？　そのうちに、記憶の旋律も響かなくなるわ」

たしかに……、アタシ……なんて名前だったっけ……？
このオンナと、いつ出遭ったんだっけ……？

【black】

アタシは握っていた携帯電話をすぐに閉じた。
電車の速度が遅くなってくる。

もう、目的地に到着だ。

アタシは意気揚々と、電車を降りることにした。

さあ。どんな服を買おう。

嗚呼、……わくわくしちゃう。

【dia】

気がつくとアタシは、アリスになっていた。

「はい。代わってね。よろしく、アリス。アタシは白ウサギ。追いかけてここを始めましょう」

アタシと白ウサギの追いかけてここがはじまった。

白ウサギは、一目散にゴール目がけて疾走した。追いつけるわけない。

アタシは、白ウサギを取り逃がしてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2437/>

アリストンネル

2010年10月13日20時21分発行